

# ドイツ文化敬愛から反ドイツ感情への変容

—第一次世界大戦前後のドイツ系アメリカ人をめぐって—

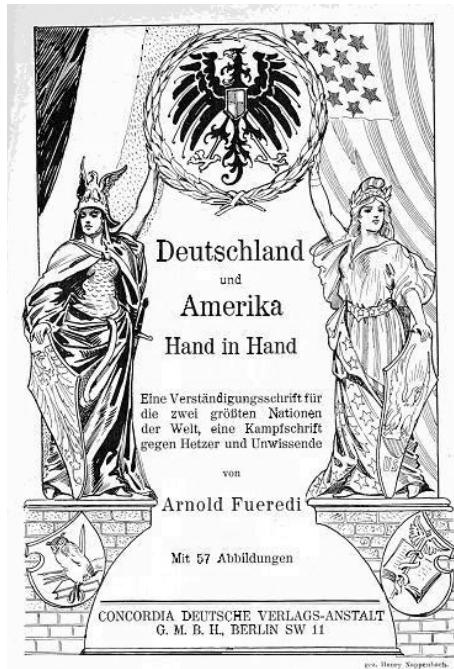
長 友 雅 美

0. 小稿の目的は、ドイツ帝国誕生前後から第一世界大戦終結の頃までのドイツ系アメリカ人をめぐる状況を、「ドイツ文化敬愛の念 Germanophilia」と「反ドイツ感情 Germanophobia」という二つの観点からできる限り時系列的に俯瞰することにある。合成語を形成する *philia* が「～に対する偏愛」を意味するに対し、*phobia* は「～を恐れる、～を嫌忌する」を意味する。これらの連結詞を用い、*Germanophila*、*Germanohobia*、あるいは元来はゲルマン民族の一分派であるテウトネス族を意味する *Teuton* を用い *Teutonophilia* や *Teutophilia* が、また「反ドイツ感情 *Anti-German sentiment*, *Anti-German hysteria*」については *Teutonophobia*、*Teutophobia* といった語彙が使用されることもある。

## 1. 「ドイツ文化敬愛の念 Germanophilia」

宰相ビスマルク主導で1871年に誕生し急速に国力を増すドイツ帝国に対し、驚嘆と畏敬が入りまじった「ドイツ文化敬愛の念 *Germanophilia*」が、アメリカ国内でも広まっていった。<sup>1)</sup> テキサス州サンアントニオ市の歴史的建造物地区「キング・ウィリアム地区」やノースダコタ州の州都名ビスマーク<sup>2)</sup>などの名称がこの証しである。1902年にはドイツ皇帝ヴィルヘルム二世の弟ハインリッヒ王子の列席のもと、「ゲルマン博物館 *Germanic Museum*」<sup>3)</sup>がハーヴァード大学校内に開館した。1911年にはドイツ帝国銀行の資金援助により、コロンビア大学にも蔵書数5万冊を有す「ドイツの家 *Deutsches Haus*」が文化交流の拠点として新設された。他方ドイツ国内には、1910年に「アメリカ協会 *Amerika-Insitut*」がベルリンに誕生、所長にはその著作がわが国でも知られているハーヴァード大学教授フーゴー・ミュンスターバーグ (Hugo Münsterberg: 1863-1916)<sup>4)</sup>が就任した。

アメリカ国内では、大学や他の高等教育機関での学問・学術文化交流のみならず、一般の公立学校でも教育言語として、ドイツ語は急速に普及していった。これを支えた原動力は、崇拜の念にも似た「ドイツ文化敬愛の念 *Germanophilia*」の風潮であった。もちろんこのような風潮を嫌う、偏狭な「排外主義運動」もその活動を再び強めてはいたが、それでも「アメリカとドイツの友好親善」という考えに多くの著名人や学者が賛同、これが支えとなり、当時最先端の科学技術とヨーロッパ人文主義の伝統を融和させていたドイツの大学をモデルに、アメリカ国内の多くの大学では様々な改革が行われていった。この教育改革の種を蒔いたのは、1815年頃にアメリカ人として先人を切ってドイツの大学で研鑽を積んだハーヴァード大学の逸材、一エヴェレット、ティクノア、コッグスウェル、バンクロフトなど<sup>5)</sup>—であり、彼らの後を追ってドイツに学んだ R.W. エマーソン (Ralph Waldo Emerson: 1803-1882)、F.J. チャイルド (Francis James Child: 1825-1896: 言語学者)、T. デワイト (Timothy Dwight: 1828-1916: 後年イエール大学学長を務めた)、A.D. ホワイト (Andrew Dickson White: 1832-1918)<sup>6)</sup> といった人たちの影響力も大であった。



左図：The Penn Germania 1912., Vol.1.No.3.の表紙。アメリカ合衆国の「星条旗」を持つ女神コロンビアと「ドイツ帝国国旗」を持つ女神ゲルマーニアが、ウィリアム・ペン William Penn (1644-1719)の立像前で握手する図。下段には、ニューヨーク市で「ドイツ出版協会 The German Publication Society」会長職を長年務めた Th. ストロウ (Theodore Sutro:1847-1927)の献呈詩文が記されている。

右図：Arnold Fueredi: Deutschland und Amerika Hand in Hand (1914年)の表紙。図柄は異なるが女神ゲルマーニアとコロンビアがドイツ帝国紋章付き花環を支えている図版。

○参考のため、この『ゲルマーニアとコロンビア』と題する【左図版の】献呈詩文の訳を記す。

我らが御母ゲルマーニア、我らが嫁コロンビア！何と麗しく、愛らしく、頼もしく響くこの言葉よ！尊敬すべしは、天真無邪な感性の我らが御母、我らの嫁も愛でられよ、今もそして世々に。汝美しき 母語、汝見事なドイツの歌。御身ドイツの誉と誠と輝かしきドイツ気風。我らがこの地にもたらした御身ら黄金の宝。汝【ゲルマーニア】は、我らの思いどおり最愛の母たりて。 おお自由の女神、コロンビア、温雅な乙女よ、汝は、未来が我らに畜養する万事。我らは財産生命も安んじ御身の手に委ねる。星条旗の庇護のもとで、我らの国のなかで！ 汝らを敬わぬ冒神者の手を枯れ朽ちよ！卑怯にも汝らを拒絶する舌【の持ち主】は【それを】麻痺させよ！我らが誓いのドイツの誠に、汝らは祝別されよ！コロンビアとゲルマーニア、今もそして世々に！ セオドル・ストロウ (ニューヨーク)

1850年の時点では200名ほどのアメリカの若者がドイツの各大学に籍を置き、その多くがゲッティンゲン大学とベルリン大学に集中していた。1876年にドイツの大学を範として創立されたボルチモアのジョンズ・ホップキンス大学の場合、同大学教員50名の大半がドイツに留学、うち13名もが博士号の学位を取得している<sup>7)</sup>。1900年頃には9,000名を超えるアメリカの若者がドイツに学んだのである<sup>8)</sup>。他方主要なアメリカの大学や学術機関にはドイツ帝国文部省派遣の「榮譽皇帝冠称」<sup>9)</sup>を持つ学者も数多く訪れた。例えばブレスラウ大学教授のオイゲン・キューネマン (Eugen Kühnemann: 1868-1946) は、1906年と1908年の各冬学期にハーヴァード大学、1912年にはウィスコンシン大学でドイツ文学の連続講義を行い、1910年にはベルリン大学教授マックス・フリートレンダー (Max Friedländer: 1852-1934) もハーヴァード大学で、ドイツ音楽史に関する講義を担当したのであった。<sup>10)</sup>

## 2. 全国ドイツアメリカ人同盟の結成

1901年10月6日―「帆船コンコード号」によるドイツ系移民13家族のフィラデルフィア港到着記念日に、フィラデルフィアの「ペンシルベニアドイツ協会」<sup>11)</sup>でドイツ文化の啓蒙と保護育成と全米中に広がりを見せ始めた「禁酒運動」に対抗する手段検討を目的に、「全国ドイツアメリカ人同盟 NGAA= National German-American Alliance」が結成された。代表理事にはチャールズ・ヘクサマー (Charles John Hexamer: 1862-1921)、副理事にはペンシルベニア大学のマリオン・リアード (Marion Dexter Learned: 1857-1917)<sup>12)</sup>が就任、1918年4月13日の解散までの17年間、アメリカ合衆国とドイツ帝国間の文化交流・友好親善促進のため様々な活動を展開していった。この団体が禁酒運動反対の立場を表明した理由は、彼らの活動資金の有力寄付団体が全米各地のビール醸造会社で、その創業者や経営者の大半がドイツ系アメリカ人であったことと、ビール愛飲とドイツ語の歌を唄うという「ビール・サロン文化」維持は、祖国から持ち込んだドイツ系民族文化の維持とその啓蒙に他ならないと考えていたためである。さらにこの1901年12月11日には、「ドイツ歴史協会 *The German Historical Society*」がフィラデルフィアにNGAA会員を中心に結成され、同会機関誌の「アメリカナ・ゲルマニカ *Americana Germanica*」<sup>13)</sup>の発行も始まった。

1905年6月21日マサチューセッツ州ウースターのクラーク大学<sup>14)</sup>のフリードリヒ・シラー没後100周年記念式に来賓として出席したセオドル・ルーズベルト (Theodor Roosevelt: 1858-1919) 大統領はドイツ文化を称賛、次のような式辞を述べた。

「ドイツが商工業、芸術、ならびに学問の世界で素晴らしき発展を可能としたのは、彼らが高き理想を抱き、この理想を実現する術に秀でているからであります。この他私が感心しているのは、また皆さま方も同じだとは思いますが、ドイツに生まれ、あるいは数週間前にドイツからやって来た私たち【米国民】の同胞が、【フリードリヒ】シラーの生涯と彼の様々な作品を思い起して祝ったということでもあります。このアメリカに移民して来るいかなる民族も、何かの方法で価値ある多くのことに寄与することが可能なのです。私たちの【アメリカ】の発展が、ドイツ民族の発展と同様、自然の理として続くなら、それは私たち全国民にとって喜ばしき事でありましょう。(中略) 私たちの国は、ドイツから多くのことを学び取りました。ドイツという国は本質的には、我々【アメリカ人】国民の血を作り上げているのです。とりわけ我々の学校や大学制度、その全ての組織、学者の育成などに関しては、秀でた基準としてその範を私たちに示してきました。(後略)」<sup>15)</sup>

大統領をして「ドイツ(という国)は本質的には、我が【アメリカ人】国民の血を作りあげている」とまで言わしめたのは、アメリカ合衆国の隅々までにドイツ文化とそれを持ち込んだドイツ系アメリカ人の様々な功績を心から賞賛している証である。この演説でルーズベルトは、とりわけ教育面でのドイツ文化の功績を讃えているが、この時代には、第19代ヘイズ大統領 (Rutherford B. Hayes: 1822-1893) の在任中に国務長官を務めたカール・シュルツ (Karl Schurz: 1829-1906) と、アメリカで初めて幼稚園を開設したその妻マルガレーテ・シュルツ (Margarethe Meyer-Schurz: 1833-1876)、スタンダード・オイル会社のロックフェラー (John D. Rockefeller, Sr.: 1839-1937)、ビール醸造業界のイェンガリング (David G. Yengling: 1806-1877)、ブッシュ (Adolphus Busch: 1839-1913)、パープスト (Frederick Pabst: 1836-1904)、シュリッツ (Joseph Schlitz: 1831-1875)、ケチャップ会社のハインツ (Henry J. Heinz: 1844-1919)、ピアノ製造のシュタインウェイ (Henry E. Steinway (Steinweg): 1797-1871)、クナーベ (Wilhelm Knabe: 1803-1864) などが広く知られ、

また、ニューヨークのブルックリン鉄吊橋やシンシナティの鉄吊橋を施工したローブリング (John A. Roebling: 1806-1869)、さらに印刷版型を作成機の発明で出版印刷革命をもたらしたメルゲンターラー (Ottmar Mergenthaler: 1854-1899) など、ドイツ系アメリカ人の活躍には目を見張るものがあった。

### 3. 様々な記念碑の序幕式典

1908年10月6日、フィラデルフィア市内のジャーマンタウン Germantown にあるフェルノン公園で、ドイツ系移民到来の225周年を祝し盛大な記念碑除幕式が挙行された。この「ドイツ人の日」<sup>16)</sup>の来賓客にはNGAA会員に混じり、その昔13家族のドイツ系移民を率いてこの地に入植したパストリウス (Francis Daniel Pastorius: 1651- c.1720) の縁者の姿もあった。<sup>17)</sup>

さらに1910年12月7日には、ワシントンDCのラファイエット公園内で、独立戦争時の英雄シュチュューベン将軍像序幕式がNGAAにより執り行われた。<sup>18)</sup>

多くの政府高官臨席のもと、ミズーリ州選出下院議員リチャード・バルトホルド (Richard



上:「ラファイエット公園内のシュチュューベン将軍 (男爵) 像  
左: 1910年12月7日の序幕式写真<sup>19)</sup>

Bartholdt: 1855-1932)<sup>20)</sup>、駐米ドイツ帝国大使ベルンストロッフ (JohannH.Graf von Bernstorff: 1862-1939)<sup>21)</sup>、NGAA会長ヘクサマーらの祝辞に続き、第27代大統領タフト (William Howard Taft: 1857-1930) が次のような演説をおこなった。

「シュチュューベン【ドイツ語風には「シュトイベン】】男爵がこの国に来たとき、男爵は彼自身よりもずっと前に、この地を終の住み処と定めたドイツ人たちがいたことに気づいていた。その時から【今日まで】数百万の人々がアメリカに移住して来た。【中略】独立戦争の日々以来、ドイツ民族は我らアメリカ市民のなかでも特段にわが国の成長発展に多大な貢献をしてきた。【中略】アメリカ市民権を得たドイツ人とその子孫たちは、まさに今日この祝典で、ドイツ生まれの一アメリカ人<sup>22)</sup>の手になるこのシュチュューベン像を、喜びに満ち誇らかに見上げるのであろう。この記念像は、我が国の独立誕生の折に、アメリカの自由とは何かを一ドイツ人軍人として示した証である。」<sup>23)</sup>

この他、マンハッタン地区のイースト川に面した旧ニューヨーク市長公邸横の「イースト・

エンド公園」をニューヨーク市当局は1911年にはカール・シュルツの榮譽を記念し「カール・シュルツ公園」と名を変えて整備し、またコロンビア大学の東に位置するモーニングサイド公園(Morningside Park)内には1913年にシュルツ記念像立像が建立され除幕式が執り行われたのである。

ドイツ帝国の誕生から第一次世界大戦勃発直前までの数十年間は、アメリカ合衆国とドイツ帝国とが、国単位での良好な関係にあっただけではなかった。シュチューベン像【上図】、ゲーテ・シラー像【次図】などが次々とアメリカ国内各地に建立されたことは、ドイツ系アメリカ人のみならず、一般のアメリカ人の間でも、「ドイツ文化に対する敬愛の念 Germanophilia」と関心が高い時期であったことを示している。しかしこの数十年間は、第一次世界大戦開戦後も厳正中立の立場をとっていたアメリカ合衆国のドイツへの宣戦布告という決断を契機に、両国の外交関係と文化交流が破綻し、かつまた「敵国ドイツ」に対する「反ドイツ感情 Germanophobia」とドイツ文化そのものの否定排除という、不幸な時期に至るまでのほんの一時の至福の時代でもあった。

イギリスがオーストリア・ハンガリー帝国とドイツ帝国に対し宣戦布告したのは1914年8月12日【フランスは8月11日、日本は8月27日】であった。この2日前、ニューヨーク市内で



【左図版出処】：San Francisco, Goethe-Schiller Denkmal Gesellschaft. San Francisco, California. Erinnerungen an den Tag der California. Midwinter International Exposition 1894, an dass Goethe-Schiller Fest. 1901 1901年8月11日のサンフランシスコ市 Golden Gate Park 内でのゲーテ・シラー像序幕式典写真【中図版】：現在のサンフランシスコ市のゲーテ・シラー像【右図版】：クリーブランド市の Wade Park のゲーテ・シラー像。1907年1月に除幕式挙行。その他1908年6月12日にミルウォーキー市 Washington Park 内に設置【1960年秋に補修】されたものと、1911年10月15日に除幕式が催されたニューヨーク州シラキュース市の Schiller Park 内にもゲーテ・シラー像がある。これらアメリカ国内にある4つの立像は、1857年にヴァイマルの Weimar の国民劇場 (Nationaltheater) 前にある立像を範として鑄造されたもの。

出版社を営むジョージ・ヴィーレック (George Sylvester Viereck:1884-1962) は、1914年8月10日イギリスとフランスからの反ドイツ宣伝を緩和する目的と、ドイツ側の主張を代弁し、アメリカが厳中立の政策を進めることを目的に『ザ・ファザーランド The Fatherland (祖国)』の編集発行を開始した。この週刊誌は同年10月には発行部数が10万部にも達したが、<sup>24)</sup> 1917年2月14日には『ザ・ニューワールド The New World』と誌名を変え、さらに『ザ・アメリカン・マンズリー The American Monthly』と変え、掲載記事内容は次第にアメリカへの忠誠を示すものになっていった。この大戦がベルサイユ条約でもって終結すると、この条約に幻滅を感じたヴィーレックは、条約と国際連盟の体制不備を糾弾し、また戦争を仕掛けたのはドイツ人との自戒の念を払拭しようという意図を抱き、この雑誌を活用していったのである。



【左】：1914年8月10日創刊号の表紙【中】：1917年2月14日号では書誌名がThe New World (The American Weekly)と変えられている。【右】1917年8月15日号で再び書誌名変更。図版はすべてHathiTrustによる。

#### 4. 「反ドイツ感情 Germanophobia」

1914年6月28日のサラエボ事件後、同年8月1日、ドイツ帝国はロシアに対して宣戦布告、第一次世界大戦が始まった。ドイツ軍のベルギー侵攻作戦により、ルバーン Louvain のサンピエール大聖堂も約30万冊もの書籍を誇っていたルバーン大学図書館<sup>25)</sup>も廃塵と化した。西フランドル地方の古都イーペル Ypers の破壊、さらにフランスのランス Rheim 大聖堂への空爆【1914年9月19日】といったドイツ軍の蛮行は、アメリカでも多くの人に衝撃を与え、Pickelhaube と呼ばれる鉄角付ヘルメットを被ったドイツ兵士の非道蛮行姿が挿絵画家によって描かれていった。

「反ドイツ感情 Germanophobia」をアメリカ合衆国内でさらに煽った要因のひとつは、ドイツ潜水艦の無差別魚雷攻撃であった。これは1915年3月28日の英国船籍のファラバ号、同年5月1日のアメリカ船籍のガルフライト号、さらに多くの合衆国市民が犠牲となった同年5月7日の客船ルシタニア号撃沈事件、同年8月19日のアラビック号事件、同年8月22日の英国船籍貨客船ダイオメッド号、同年12月30日のパーシア号撃沈事件など<sup>26)</sup>であった。因みに、英国船籍の船だけでも、1914年8月から1915年3月までのファラバ号事件までに670隻ほどがドイツ海軍の攻撃を受けている。これにフランス船籍やアメリカ船籍などを含めると、この数はもっと多くなるはずである。国際法に反した潜水艦の魚雷攻撃無警告攻撃が本格化したのは、1917



左：The Literary Digest. May 22.1915.p.1200. 中：Life. July 15. 1915 右：Cartoons magazine Vol.9.1916.p.557

年1月31日の潜水艦による無差別攻撃宣言後の2月半ばからであった。1917年2月7日には、英国船籍の客船カリフォルニア *California* 号<sup>27)</sup> が攻撃を受け沈没した。これらを受け「反ドイツ感情 *Germanophobia*」が高まるのと同時に、参戦論者の声が強くなっていったのは当然の成り行きであった。

1915年の6月24日、ニューヨーク市内マンハッタン地区のマジソン・スクウェアガーデンを会場に、アメリカ合衆国の参戦阻止の決議を目的として、大規模な集会在 *NGAA* 主催で開かれた。<sup>28)</sup> ドイツ系アメリカ人の体育協会、合唱協会、様々なキリスト教会派、そしてドイツ人学校や各地で発行されていたドイツ語新聞などがアメリカの戦争介入反対を表明し、中立を守る運動を展開していくが、「ドイツ」という名が含まれたどの団体組織も、結局はドイツ皇帝と彼を取り巻くユンカー【*Junker*: 東部ドイツエルベ川以東の世襲地主】貴族政府の「汎ドイツ主義 *Pan-Germanism*」へ通じる組織化されたドイツ帝国の宣伝の一部として危険視されていったのである。

アメリカ合衆国が厳正中立主義の政策を守り続けていたとき、ドイツ系アメリカ人の大半がドイツ皇帝ヴィルヘルム支持の態度を保っていた。だが1917年4月2日の宣戦布告【ウィルソン大統領の両院での議会演説後、下院で373票対50票、上院で82票対6票で直ぐさま宣戦を布告】により、ドイツ系以外のアメリカ人たちは「アメリカへの愛国心」を旗印に「反ドイツ感情 *Germanophobia*」を赤裸々に現し始めた。この時代風潮は「脱ゲルマン化運動」にまでエスカレートし、さらにアメリカ合衆国への愛国心と称し「敵性文化排除運動」にまで拡大していったのである。

ウィルソン大統領がドイツに対し宣戦布告を決意した要因のひとつには、ドイツ外相ツィンマーマン (*Arthur Zimmermann*:1864-1940) がメキシコ政府に打電した暗号電報を、1917年1月に英国海軍情報部が解読し公表したことと関係があった。この暗号電報はメキシコがドイツと同盟を組むなら、戦勝の暁に、かつてのメキシコ領土、すなわち1848年にアメリカに譲渡したニューメキシコ、アリゾナ、テキサスなどの奪還を支援するという内容であった。この電報が3月1日付で全米の主要新聞に掲載され、ウィルソン大統領は「反ドイツ感情 *Germanophobia*」一色となった国内世論を見極めながら3月20日にホワイトハウスで緊急会議を開催、4月2日の宣戦布告に備えたのであった。1917年4月6日、同大統領は国内居住の「ドイツ系の外国人」からの脅威感の軽減政策として「在留敵国人」—市民権未獲得の敵性国家出生の外国人居住者—のために12条からなる規則を出した。時を同じくして大統領の要請で誕生したのが「公共情宣委員会 *Committee on Public Information (CPI)*」であった。<sup>29)</sup> ジャーナリスト出身の同委員会委員長ジョージ・クリール (*George Creel*:1876-1953) は、戦争への合衆国参戦は重要な意味を有し、そのためには全アメリカ市民が国に忠誠を尽くすことが不可欠であると、前例のない宣伝運動を開始した。具体的には「ドイツに好意を持つ」人々やアメリカ合衆国に忠誠を誓わないと判断した組織を密偵調査、さらに全米中で「反ドイツ感情 *Germanophobia*」を煽る宣伝ポスターの製作掲示を容認したのである。この「公共情宣委員会 *CPI*」の活動は国内の愛国感情を刺激、それとともに「反ドイツ感情 *Germanophobia*」が急速に広まり、ドイツ語授業禁止のみならず、子供たちの歌集から『幼いハンス *Hänshchen klein*』、『おおもみの木よ *O Tannenbaum*』といったドイツ民謡の楽譜さえも破り裂かれる異常な状態になっていった。ドイツ料理の定番の酢漬けのキャベツ「ザウワークラウト *Sauerkraut*」は、「勝利のキャベツ *victory cabbage*」もしくは「自由キャベツ *liberty cabbage*」、広くアメリカ人に食されていた「ハンバーガー」は「自由ステーキ *liberty steak*」あるいは「ソールズベリー・ステーキ *Salisbury steak*」、「自由サンドイッチ *liberty sandwiches*」、「ダッ

クスフンド *dachshunds*」は「自由犬 *liberty Hounds*」あるいは「自由子犬 *liberty pups*」、*「シェパード犬 Shepherd Dog」*の代わりに「アルセーション *Alsatian*」、さらに一部の医者たちは、病名の「ドイツ麻疹 *German measles*」でさえ「自由ハシカ *liberty measles*」という具合な名称変更であった<sup>30)</sup>。まさにこれはアメリカの歴史の中で実際に起こった極端な「ことば狩り」であった。このようにドイツ語とドイツ文化を組織的に根絶する動きは、愛国心の装いのもとで力を増し、さらに「親ドイツ派 *pro-German*」とみなされた人々は、仕事場で嫌がらせを受け、場合によっては集団リンチに近い危害を加えられるといった事態が各地で発生した。このような「反ドイツ感情 *Germanophobia*」の高まりは、ついに1917年6月15日に連邦議会で、アメリカ合衆国に不忠実で反逆的態度を公の場でとる市民に対しては、10,000ドルもしくは懲役20年役刑を科すことが可能な「防諜法 *Espionage Act*」を通過させてしまった。<sup>31)</sup> この法律に抵触したとして1917年に、女性解放運動家エンマ・ゴールドマン (*Emma Goldman: 1869-1940*) とアレクサンダー・パークマン (*Alexander Berkman: 1870-1936*)、翌1918年にはプロイセン公国出身のアドルフ・ゲルマー (*Adolph Germer: 1881-1964*) やロシア生まれのドイツ系移民ローゼ・パスター・ストークス (*Rose Pastor Stokes: 1879-1933*) といった社会運動家らが相次いで逮捕され、ストークス女史<sup>32)</sup>はこの「防諜法」の重大な違反者としてカンザスシティの法廷で懲役刑10年が言い渡されたのである。

1917年秋、アメリカ市民権未取得の国内在住外国人のうち、ドイツやオーストリア出身者に対し登録管理のため、関係当局への一斉出頭が命じられた。これと同時に、合衆国司法長官にはこれらの「在留敵国人」に対し、住居地変更と旅行制限、彼らが所属する団体の定期刊行物の監視・検閲をする権限が与えられたのである。また「在留敵国人」の団体はその活動内容を当局に報告する義務が負わされた。これは戦争や緊急事態の発生時に、超法規的措置を用いて「敵性外国人」を逮捕拘束できる権限を大統領が有するという1798年制定の「敵性外国人法」を運用したに過ぎないが、実際にはドイツ系アメリカ人は「敵国人」も同然であるとの暗黙の認識によるものであった。

1918年5月16日、司法長官グレゴリー (*Thomas Gregory: 1861-1933*) の肝いりで「防諜法」修正案が出され、「煽動罪法」が連邦議会を通過した。司法長官グレゴリーは、ただちに自警組織「アメリカ保護同盟 *American Protective League*」を結成させ、全米各州にも「国防委員会 *The Council of National Defense*」が設置され、20万人ほどの退職警官が「外国人容疑者と不誠実な市民」に関する情報を司法省に提供することを目的にボランティア刑事として再雇用され、さらに全米の郵便局にはドイツ語と他の外国語の書類検閲が職務権限として許可された。<sup>33)</sup> 前年施行の「防諜法」とこの「煽動罪法」によって危険思想の持ち主と目された人物の取り締まりは強化され、アメリカ国内のドイツ語新聞も英語版を付加するように指導され、さらに記事内容も各地区の連邦郵便局によって検閲を受け、これが不相当と判断されるや特定郵便物の指定から除外された。不穏分子とみなされた人々は官憲により次々と逮捕拘束され、その中にはアメリカ社会党の大統領候補者ユージン・デブス (*Eugene Victor Debs: 1855-1926*)<sup>34)</sup> や同党員で合衆国連邦下院議員も務めたヴィクター・バーガー (*Victor Louis Berger 1860-1929*)<sup>35)</sup> も含まれていた。また「国防委員会」は「反ドイツ感情 *Germanophobia*」を煽るためにアメリカの映画界と連携し、1918年3月に『皇帝はベルリンの獣 *The Kaiser, die Beast of Berlin*』、同年6月に『皇帝と地獄へ行け *To Hell with the Kaiser*』、同年8月年に『ベルリンの変り者 *The Geezer of Berlin*』などのドイツ皇帝を揶揄したプロパガンダ映画を制作公開させたのである。





Moving Picture World.  
Vol.37.,July 6. 1918,p.138



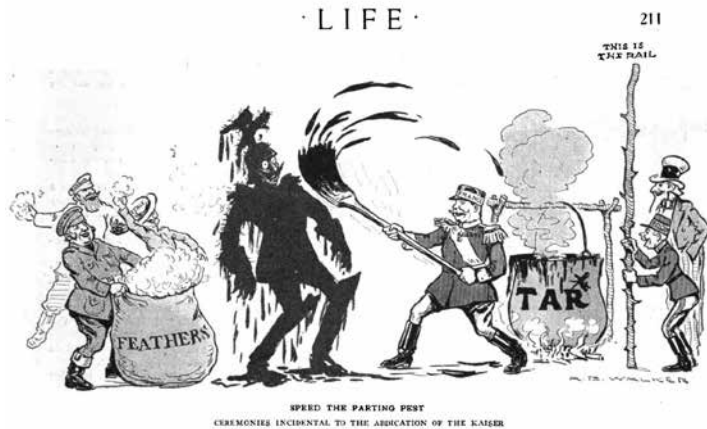
Moving Picture World.  
Vol.37.,July 6. 1918, 頁番号なし

た。多くのドイツ語教師が解雇され、ドイツ語の教科書や参考書が廃棄処分となった。ドイツ系アメリカ人の子弟が通う教区学校は、次世代に彼らの文化と伝統を伝えるため、ドイツ語を教育手段の主言語としていたが、同州政府が授業言語のドイツ語にまで制限を加えようとしたとき、父母は自分たちの民族の文化的アイデンティティの基盤が攻撃されたと感じたのは事実である。にも関わらず父母たちは、自分たちが選んだ「自由の国アメリカ」に忠誠を誓いドイツ語を捨てる方が大切であると考えたのである。

## 5. ロバート・P・プレーガー事件<sup>36)</sup>

アメリカがドイツに対し宣戦布告からちょうど1年後の1918年4月5日未明、イリノイ州南部コリンズヴィレ Collinsville で、ドイツのドレーズデン生まれの炭鉱夫ロバート・プレーガー (Robert Paul Prager:1889-1918) が、スパイ嫌疑をかけられ同僚に捕縛された。プレーガーは家から引きずり出され、350名にも膨れ上がった烏合の衆目のさなか、合衆国国旗に接吻し国歌を歌うことを強要された。プレーガーは、合衆国に忠誠心を抱く自分はドイツのスパイではないと断言したが、人々はこれを無視し町外れの木にロープをかけ、プレーガーを吊し首で殺害した。このリンチ事件で起訴された16名の被告人は、弁護側の「憂国の殺害 patriotic murder」という主張が影響を与え、わずか25分の陪審員会議が無罪を裁判長に提言、被告全員は6月1日に無罪放免となったのである。この事件はドイツ系アメリカ人に対する嫌がらせの極みであったものの、不幸な出来事のひとつにしかすぎず、当時各地で起きたドイツ系アメリカ人に対する嫌がらせは相当なものであった。オレゴン州ユージーン Eugene では、ドイツ系アメリカ人の合唱団のピアノが暴徒により壊され、オハイオ州バーミンガム Birmingham では、ある牧師館乱入の暴徒が本を燃やし、テキサス州ビショップ Bishop では、ドイツ人のルター派牧師を暴徒が鞭で打ち重傷を負わせた。ドイツ語を話す聖職者たちは、上半身裸にされ、コールタールを塗られたその上を鳥の羽で覆う「タールと羽毛 tar-and-feathering」という残酷なリンチとともに「国旗への接吻 flag-kissing」が強制され、さらには国家に対する不忠者とみなされた人の居宅やドイツ系アメリカ人が通う教会にも、黄色のペンキを塗られた<sup>37)</sup> といった悪意満々の儀式が、「愛国者」と自称する人々の間に伝染病のごとく広がっていった。

デラウェア、アイオワ、モンタナなどの州ではドイツ語とドイツ文化を教えることが非合法化



ドイツ皇帝が「タールと羽毛 tar-and-feathering」というリンチ刑に遭っているのをアメリカ合衆国を代表する Uncle Tom が見つめている図版。出処：Life. Vol.70.1917.p.211.

され、公の場でのドイツ語会話も制限された。全米中で図書館司書は書架からのドイツ語の本のみならずドイツ人の著作本の処分に奔走、さらに出版会社も、ドイツ帝国の支持者との風評批判を避けるためドイツ関係の出版物の印刷販売中止に踏み切った。

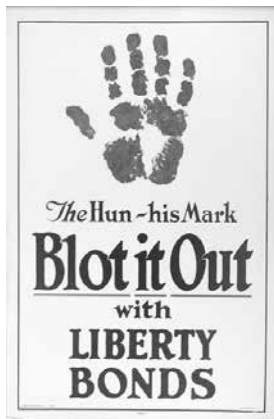
サウスダコタ州ヤンクトン Yankton では高校生たちがドイツ語の書籍

を合衆国国歌唱和のなかミズーリ川に投げ込み、ネブラスカ州のオークランド Oakland、ホーパー Hooper、グランド・アイランド Grand Island などでは公道でドイツ語の書籍を焼却、またコロラド州ボルダー Boulder でも、コロラド大学併設予科の支援で「ドイツ語書籍焚書の集会 German-book-burning rally」が開催されたのである<sup>38)</sup>。1918年6月13日には、ウィスコンシン州のパラブー Baraboo 市内の公道でドイツ語教科書が州の警備隊によって焼却され、また同年6月7日には、同州メノミネー Menominee 市内で学校当局が学生たちを煽りドイツ語教科書焼却の儀式を執り行い<sup>39)</sup>、さらに1918年9月初旬にはカンザス州のヘリングトン Herington のルター派教区学校が極右集団により放火されという事件まで起こってしまった。<sup>40)</sup>「反ドイツ感情 Germanophobia」は高等教育機関にも深刻な影響を及ぼし、ドイツ語授業に定評のあったウィスコンシン大学では、1917年には全学4000名の学生のうち、ドイツ語専攻の学生数が1400名にも達していたが、その2年後にはわずか180名にまで激減してしまった。<sup>41)</sup>ドイツ系アメリカ人の各種団体や企業ダメージも破壊的で、とくにドイツ語の新聞は、1910年には全米で554紙も発行されていたが1920年には234紙にも減少してしまった。1901年結成のNGAAは、「禁酒法」に関しては政治家を動かしこの法律撤廃を目指した圧力団体でもあった。ドイツとアメリカ合衆国の関係が次第に悪化するなか、この団体の活動は活発化、第一次世界大戦勃発直前には「ドイツ擁護」活動もその頂点に達していった。しかしながら、ドイツ語で記されたこの同盟の意見は、「反ドイツ感情 Germanophobia」を煽っていた人々により、悪意をもって解釈され英語に翻訳されていった。ドイツ系アメリカ人が出入りする各派のキリスト教会でも、ドイツ語礼拝が次第に減少、NGAA もついに1918年4月には解散を余儀なくされたのである。

ドイツ音楽も「反ドイツ感情 Germanophobia」の対象となった。ベートーヴェン、ワーグナー、ブラームスなどの音楽演奏が自粛から禁止へ移行し、全米各地の音楽会プログラムからドイツ人音楽家の名前は姿を消していった。1917年11月10日、フィラデルフィア管弦楽団は、ドイツ音楽の演奏は行わないとする声明を出した。カリフォルニア州では州の教育委員会が、音楽の教科書からすべてドイツ語の唱歌の掲載頁を引き裂くことを命じ、ドイツ語で上演されていたミルウォーキーとセントルイスの劇場は閉鎖を余儀なくされた。<sup>42)</sup>1918年3月25日には、ボストン

交響楽団指揮者カール・ムック (Carl Muck: 1859-1940)<sup>43)</sup> が国の安全を脅かしたとの理由で逮捕される事件が発生した。逮捕理由は前年 11 月の「音楽シーズン開幕時」恒例の『星条旗よ永遠なれ *Star-Spangled Banner*』<sup>44)</sup> の演奏を拒否したというだけのことであった。だがこの行為は「敵性外国人 *enemy aliens*」というレッテルをこの指揮者に貼り付けるに十分で<sup>45)</sup>、ムックは 1919 年 8 月までジョージア州のフォート・オグレスープ Fort Oglethorpe 刑務所に収監された。またウィーン出身でシンシナティ交響楽団の首席指揮者エルンスト・クーンヴァルト (Ernst Kunwald: 1868-1939) は、1917 年 11 月のピッツバーグでの演奏会場で『星条旗よ永遠なれ』で始まった演奏会の折、真偽はともかくも「このような演奏は気に入らない、私の心は別のところにある」という意味に取れる発言をしたという理由で、「アメリカ革命子女会 *Daughters of the American Revolution*」という愛国団体により敵性国家の人物として告訴され、1917 年 12 月 8 日に逮捕、1 月にムックと同じ刑務所に収監された。彼が自由の身となったのは戦争が終わってからであった。<sup>46)</sup>

戦費捻出のため、アメリカ政府はヨーロッパ諸国に倣い「自由公債 *Liberty Bonds*」と呼ばれる戦時公債発行を決定した。表向きは「自由意志」による購買方法であったが、公債発行元の財務省が各都市の住民数に合わせた販売割当てを事前に決め、その販売実績を愛国主義の指数と判断する方法で、実質的には強制購入であった。しかも公債販売を各行政区に設置された「防衛委員会 *Councils of Defense*」に委ねたことで、強制的販売に拍車がかかったのであった。ドイツ系アメリカ人は自由公債購入を強要され、不誠実な意見を吐くと密告され、星条旗接吻の儀式に参加を強制された。宗派によってかなりの温度差はあったものの日曜日のキリスト教会で司祭や牧師までもが、説教中にこの戦時公債購買を勧め、また非戦・平和主義を貫く、キリスト教再洗礼派のメノナイト派やフッター派の人びとがその購買を拒否すると、彼らが飼育していた牛馬を強制的に物納させたのである。<sup>47)</sup>



左: 第 1 回 (1917 年) の自由公債宣伝ポスターの一枚: 「フン族、その印、その汚れを自由公債によって拭拭せよ」

右: 第 3 回 (1918 年 4 月と 5 月) の自由公債 (*Liberty Bonds*) 宣伝ポスターの一枚: 「自由公債によってフン族 (ドイツ兵) を打ちのめせ」【「フン族」とは元々は 4・5 世紀にヨーロッパに押し入ったアジア系遊牧民族の意味であるが、第一次世界大戦時にドイツ人兵士に対する蔑称として用いられるようになった。】

全米に広がった「反ドイツ感情 *Germanophobia*」の嵐が引き起こした滑稽な出来事が数例ある。1918 年には、シンシナティの「ドイツ相互保険会社 *German Mutual Insurance Co.*」が社名を「ハミルトン郡相互火保険会社 *Hamilton County Mutual Fire Insurance Co.*」<sup>48)</sup> と変え、ドイツ語でも印刷されていた定款を英語のみにし、同社所有の「ゲルマーニア女神像」——シンシナティのドイツ系アメリカ人文化の象徴であった——は女神名もアメリカ精神を象徴する「コロンビア」に変えられ、またミルウォーキーでは、市内最大のドイツ語出版会社と保険会社を経営するジョー

ジ・ブルンダー (George Brumder:1839-1910)<sup>49)</sup> 所有のゲルマーニアビルディングの正面の「ゲルマーニア女神像」の撤去が強いられたのである。さらにシンシナティの「ジャーマン・ナショナル銀行 *The German National Bank*」は「リンカーン・ナショナル銀行 *The Lincoln National Bank*」、「ウエストジャーマン・ナショナル銀行 *The West German National Bank*」は「ウエスト信用銀行 *The West & Trust Co.*」と名を変え、ミルウォーキーでもドイツ系アメリカ人の上流社交団体「ドイツ倶楽部」は「ウイスコンシン倶楽部」とその名称変更を余儀なくされたのである。<sup>50)</sup>

シンシナティでは、1918年4月8日にドイツ風名称を町名から削除する運動も起こった。町名に関する委員会が、市内のドイツ起源の街路名を英語風に変更する提案を市議会に報告し、市議会は条例策定し、下表のように変更したのである。<sup>51)</sup>

元の名称	1918年4月8日の変更
German Street ジャーマン通り	English Street イングリッシュ通り
Bismarck Street ビスマルク通り	Montreal Street モントリオール通り
Berlin Street ベルリン通り	Woodrow Street ウッドロー通り
Bremen Street ブレーメン通り	Republic Street 共和国通り
Brunswick Street ブランズウィック通り	Edgecliff Pt エドゲクリフ・ポイント
Frankfurt Street フランクフルト通り	Connecticut Avenue コネチカット・アベニュー
Hamburg Street ハンブルク通り	Yukon Street ユーコン通り
Hapsburg Street ハプスブルグ通り	Merrimac Street メリッリマック通り
Schumann Street シューマン通り	Meredith Street メレディス通り
Vienna Street ウィーン通り	Panama Street パナマ通り
Humboldt Street フンボルト通り	Taft Road タフト通り

大都市シカゴでは、目にあまるほどの「反ドイツ人感情 *Germanophobia*」はみられなかったものの、それでも自分たちの文化遺産を隠すことが望ましいと、ドイツ系アメリカ人の諸団体の多くは判断したようで、1865年結成のドイツ系アメリカ人の合唱協会のひとつ「ゲルマーニア男性合唱団 *Germania Männerchor*」は1918年5月9日に「シカゴ・リンカーン倶楽部 *Chicago*



左図：Jahrbuch der Deutschen in Chicago für das Jahr 1915., S.254 より。ドイツ語による宿泊部屋料金明細がドイツ亀の子文字を印刷されている。中図：Die Deutsche Zeitung Charleston, SC. 3. März 1917 の広告。右図：Die Deutsche Zeitung Charleston. (American Edition) 14. April. 1917. 【アメリカが宣戦布告後】のチャールストン「ドイツ新聞」(英語版)の広告

Lincoln Club」(1921年に再び元の名に戻る)と名を変え、また「ホテル・ビスマルク Hotel Bismarck」は「ホテル・ランドルフ Hotel Randolph」、「ホテル・カイザーホーフ Hotel Kaiserhof」は「ホテル・アトランティック Hotel Atlantic」、さらに「カイザー・フリードリッヒ相互保険組合 Kaiser Friedrich Mutual Aid Society」は「ジョージ・ワシントン慈善保険組合 George Washington Benevolent and Aid Society」、またインディアナポリスでも、地元の体育協会本部と練習場ならびに図書館とレストランを持つ「ドイツェス・ハウス Deutsches Haus」の名前が「アセネウム Athenaeum」に、それぞれ名を変えざるを得なかったのである。<sup>52)</sup>

## 6. ドイツ語を目の仇とした2人の州知事

ドイツ人とドイツ文化に対し、恐れと嫌悪感が入り交じった「反ドイツ感情」はドイツ語の使用自体に対する反感としても全米に広がっていった。その先鞭を切ったのはアイオワ州である。1918年5月23日に、同州知事ハーディング(William Lloyd Harding:1877-1934)が「バベル宣言 The Babel Proclamation」<sup>53)</sup>を発表、さらに翌1919年4月9日には、ネブラスカ州議会が公立私立を問わず州内のすべての学校では、第8学年の以下で英語以外の外国語授業を禁じた「サイマン法 Siman Act」を採決した。英語による支障なき意思疎通のみが移民の国アメリカでは真の「民族同化」を促進する手段だとハーディングは考えたのである。これはアメリカ合衆国に対する愛国心に裏打ちされた「反ドイツ感情」の対象として、ドイツ語は「野蛮人の言葉」というレッテルを貼られていくことを意味していた。さらに、1919年4月1日、オハイオ州知事ジェームス・コックス(James Middleton Cox: 1870-1957)は、公立、私立、教区立を問わず、すべての学校でのドイツ語授業を禁止する特別声明を発した。<sup>54)</sup>

こうしてドイツ語の使用をすべての学校、公共機関で禁止することを州法で決定したのはこのアイオワ、ネブラスカ、オハイオ3州であったが、これはドイツ系アメリカ人にとってはまことに皮肉なことである。この米国中西部の3州は、ウィスコンシン州、ペンシルベニア州、イリノイ州、ニュージャージー州とともに、比較的ドイツ系アメリカ人が多く居住する州であり、彼ら

が集う様々な文化団体や体育育成協会の活動が活発であったからである。アメリカ中西部諸州では約18,000もの人びとが戦争中に各州の言語法規の違反者として告発されたという<sup>55)</sup>。州法によって外国語、それもとくに「敵性言語」のドイツ語使用制限もしくは禁止政策が打ち出された州の数は次第に増え、全米26もの州に広がっていったのである。

1920年5月25日、ネブラスカ州ハミルトン郡 Hamilton County のハンプトン Hampton では、キリスト教シオン派教区学校のドイツ語教師ロバート・マイヤー(Robert T. Meyer: 生没年不詳)が、ライモンド・パパート Raymond Parpart という名の学生に、ドイツ語の聖書の読み方を教えたというだけで、ネブラスカ州の外国語授業に関する法令違反だとして告訴され、同州の最高裁判所で罰金刑25ドルの判決が下された。これは前年の1919年の4月9日付けで、ネブラスカ州議会を通



図版出処: The Literary Digest. March 30, 1918 Nr.56. (p.21) ドイツ語の授業はドイツ帝国の軍国主義教化を意味する、ということを皮肉った図版

過した「サイマン法 *Siman Act*」に基づく有罪判決であった。これを不服としマイヤーは連邦最高裁判所に上訴、マイヤーの言い分は認められ、ネブラスカ州の外国語授業に関する州法は合衆国憲法違反に当たるとして無罪判決が下されたのである。私立学校や教区学校でのドイツ語教育の禁止を意図した州法は「合衆国憲法第 14 修正条項」違反であり、それ故に連邦裁判所は、私立学校や教区学校で教えるべき言語の選択は自由であるとの判断を下したのであった<sup>56)</sup>。これは第一次世界大戦終結後もなお続いていた「ドイツ語狩り」に対するひとつの楔くまびとなったのである。

## 7. 結びにかえて

第一次世界大戦が始まる前の「ドイツ敬愛の念」から、ルシタニア号撃沈事件を契機としたアメリカ合衆国の参戦とそれに伴う「反ドイツ感情」の中で、アメリカ合衆国居住の数百万のドイツ系アメリカ人は、その民族文化の根幹であるドイツ語の使用禁止を余儀なくされ、あるいは自らドイツ系移民の子孫であることを隠すような状況に追い込まれていった。様々な領域でアメリカ合衆国の発展に寄与してきた数多くのドイツ系アメリカ人の努力とその足跡は葬り去られていった。ただドイツ語文化という観点から見て、まったく例外と考えてよいのは、同じドイツ系アメリカ人であっても特定宗教集団で平和主義者のメノナイト派やアーミシュ派、それにフットライト派といった人々が、それでもなお、自らの生活言語を維持し育成していったことは、ある意味ではアメリカ合衆国が「懐の広さ」を有していることを示しているのかも知れない。

戦争が始まった時、アメリカ国内ではドイツ語新聞の発行部数が一時期増加することがあった。これは祖国で起きている事件をいち早く知りたいというドイツ系アメリカ人の気持ちの現れである。記事の出所が英国やフランス経由でなく、ドイツ経由である方が信頼がおけたのかも知れない。だが、合衆国政府のドイツ帝国に対宣戦布告は、結果的にドイツ語系の新聞各社や出版業界に大打撃を与えてしまった。戦前発行の 500 近くものドイツ語による新聞や雑誌は「反ドイツ感情 *Germanophobia*」と、それに伴うドイツ語文化自体への嫌悪感、隣人からの嫌がらせを恐れた定期購読者の激減などの理由で、その大半が廃刊に追い込まれるか英語版に変身していった。だがこうした状況を乗り越え、第一次世界大戦後にも生き残ることができたドイツ語版の新聞もあり（例：The New Yorker Staatszeitung、Freie Presse für Texas）また業界新聞の中にはそのまま発刊<sup>57)</sup>を続けていたものもあったことに注目しておく必要があるであろう。

## 注

- 1 プロイセン公国の首相ビスマルク（Otto von Bismarck:1815-1898）の主導のもと、1871 年 1 月 18 日、フランスのベルサイユ宮殿「鏡の間」で「ドイツ帝国」誕生が祝された。初代皇帝ヴィルヘルム一世（Wilhelm I.: 在位 1871-1888）は 1888 年 3 月に 91 歳で他界。病身の息子フリードリヒ三世に代わり、その子ヴィルヘルム二世（Wilhelm II.:1859-1941：在位 1888-1918）が 19 歳の若さで皇帝の地位を継承した。その 2 年後国内外の政策対立でビスマルクは罷免され政界を去る。1918 年 11 月 3 日のキール軍港での海軍水兵蜂起を契機に帝国各地で動乱が発生、これを抑えきれず、ヴィルヘルム二世は同年 11 月 9 日に退位、翌日オランダに亡命しドイツ帝国は崩壊の道をたどることになる。
- 2 「キング・ウィリアム地区 *King William District*」はドイツ帝国初代皇帝に因み命名されたテキサス州サンアントニオ市内の瀟洒な建物が並ぶ住宅街。この地区に第一世界大戦前後は財をなした多くのドイツ系アメリカ人が居住していた。ノースダコタ州の「ビスマルク *Bismarck*」はノーザン・パシフィック鉄道技師エドウィン・ジョ

- ンソン (Edwin M Johnson:1803-1872) の名をとりエドウィン・トン *Edwinton* 【「エドウィンの町 *Edwin's town*」】と呼ばれていたが、同鉄道会社に資金と技術援助の筋道をつけたドイツ帝国宰相ビスマルクの功績を称え 1873 年に改名された。
- 3 1950 年に「ブッシュ・ライジナー博物館」と名称変更されたこの施設は、セントルイスの「ビール男爵」のひとり Adolphus Busch (1839-1913) とその義理の息子の Hugo Reisinger (1856-1914) が資金と貴重なドイツの収集品を提供、ハインリヒ王子来賓のもとに開館した。「ビール男爵」とはビール醸造会社経営で財をなした起業家に付けられる冠称のこと。因みにアメリカのビール会社の大部分がドイツ系アメリカ人による創業である。
  - 4 Arnold Fueredi: *Deutschland und Amerika Hand in Hand. Eine Verständigungsschrift für die zwei größten Nationen der Welt, eine Kampfschrift gegen Hetzer und Unwissende.* Berlin: Concordia Deutsche Verlag-Anstalt., 1914, S.100. ライプチヒ大学の Wilhelm M. Wundt (1832-1920) のもとで学位取得後、ミュンスターバーク【ドイツ風の読み方ではミュンスターベルク】はさらにハイデルベルク大学で医学を学び、その後アメリカへ移住。長年ハーヴァード大学で応用心理学の研究に従事。第一次世界大戦勃発後はドイツ人擁護の弁明者としても活動。ミュンスターバークの著書【*Die Amerikaner.* Berlin: Ernst Sigefried Mittler & Sohn 1904】は、『米国民』【岡村多計志訳、大日本文明協会、明治 44 年 (1911)】として出版されている。この邦訳版（「例言の部」）には次のように記されている。「本書の著者フーゲー・ミュンステルベルヒ博士は獨逸人にして、米國ハーヴァート大學の心理學教授たり。(中略) 氏が如何に深く米國の事情に精通せるかは、今回獨逸が其文部省に獨米二國の學術上の連鎖たるべき「アメリカ・インスチテット」を新設するに當り、氏を以て其最初の幹事に挙げたるを以ても察知せらるべし。」
  - 5 これについては拙稿【長友雅美：『アメリカにおけるドイツ語文化の受容～「前 48 年組」のカール・フォレンをめぐって』・東北大学大学院『国際文化研究科論集』、第五号 (1997 年) p.66f.】を参照されたい。
  - 6 イェール大学卒業後 1853 年から 1856 年までベルリン大学に学び、帰国後は 10 年ほどミシガン大学で歴史学の教鞭をとる。後 E. コーネル (Ezra (Esra) Cornell: 1807-1874) とともに 1865 年にコーネル大学 Cornell University の創設に尽力し初代学長を務め、後 1879 年から 3 年間外交官としてドイツ、1892 年から 2 年間ロシア、さらに 1897 年から 1903 年まではベルリン駐在アメリカ合衆国大使として活躍。
  - 7 Richard Hofstadter/Walter P. Metzger: *The Development of Academic Freedom in the United States.* New York, 1955: p.377.
  - 8 Jeffrey L. Sannons: *Kuno Franke's Edition of The German Classics (1913-15). A historical and critical overview.* New York, Washington D.C. et al., Peter Lang, 2009, p.83.
  - 9 「榮譽皇帝冠称」とは Kaiser Wilhelm Professor XY という称号を得ること。最初の称号授与者はコロンビア大学で頻繁に講演会を催したミュンヘン大学の英語学教授ヨーゼフ・シック (Josef Schick: 1859-1944) である。
  - 10 Jeffrey L. Sannons: 上掲書, p.43.
  - 11 The German Society of Pennsylvania 1764 年 12 月 26 日にフィラデルフィアに創設され、現在も活動を続けるアメリカ合衆国最古のドイツ系アメリカ人の文化育成団体。
  - 12 1887 年ドイツのライプチヒ大学で博士号を取得、帰国後ジョンズ・ホプキンス大学で教鞭をとり、後ペンシルベニア大学独文学科教授として活躍、退職後は 1917 年に亡くなるまで、ドイツ系アメリカ人の文化的貢献のため様々な仕事に従事。とくに 1901 年の「ドイツアメリカ人同盟 *NGAA*」結成と「ドイツアメリカ歴史学会 *German-American Historical Society*」の創設に力を注ぎ、1911 年にはドイツ帝国から「赤鷲賞付騎士団員 *Knight of the Royal Prussian Order of the Red Eagle*」に列せられた。
  - 13 1897 年に創刊され 1918 年に廃刊に追い込まれた。Charles Thomas Johnson: *The National German-American Alliance, 1901-1918: cultural politics and ethnicity in peace and war.* Ph. Diss (Graduate College of the Western Michigan Univ. 1997.). (=Ann Arbor. UMI No. 9817115)
  - 14 この Clark University は、1909 年にフロイト (Sigmund Freud: 1856-1939) が Clark Lectures と呼ばれる精神分析に関する連続講義を行ったことで名高い。
  - 15 Max Kullnick: *Staats-und Lebenskunst von Theodore Roosevelt. Aus seinen Reden und Botschaften ausgewählt.* Zweite Auf., Berlin: Karl Curtius. 1910.S.169f.
  - 16 これが 1987 年に第 40 代合衆国大統領レーガン (Ronald Reagan: 1911-2004) による大統領令以来、毎年ホワイトハウスから祝辞が発せられる「ドイツ人の日 German Day」の発端のひとつで、大統領祝辞は毎年ウェブサイト上でも公開される。

- 17 Jeffrey L.Sannons: *The Paradox of German-American Identity*. Princeton/Oxford: Princeton Univ. Press. 2004, p141.
- 18 Armin M.Brandt: *Friedrich Wilhelm von Steuben. Preußischer Offizier und amerikanischer Freiheitsheld*. Halle (Saale), Mitteldeutscher Verlag, 2006. S.237f., Don H.Tolzmann: *The German-American Experience*. NY: Humanity Books, 2000., P.269. この立像のレプリカは、アメリカ政府からドイツのポツダムに送られ、1911年9月2日に、ドイツ皇帝、帝国首相、アメリカ大使、シュチューベン (=シュトイベン) 男爵の末裔などの列席のもと開幕式が開催された。だが1945年4月14日の夜戦火に見舞われ、後に金属回収物として撤収され、1994年11月28日にドイツとアメリカ合衆国との友好を願い、新しい立像が設置された。
- 19 図版出処: Herman H.B.Meyer: *Proceeding upon the unveiling of the statute of Baron von Steuben. Major general and inspector general in the continental army during the revolutionary war*, in Washington.D.C., December 7.1910., Washington. Govt. Print.off., 1913 [?], p.51.
- 20 北独チューリンゲンのシュレイツ【*Schleiz*: ゲラ *Gera* 南方約45Kmに位置する小村】に生まれ、1872年ニューヨークのブルックリンに一時期居住。後1877年ミズーリ州セントルイスに移り、地元の新聞社セントルイス・ドリビューン紙の編集に従事、その後同市の教育委員会委員を歴任し1890年から2年間は同委員会委員長職を務めた。
- 21 1908年から1917年までドイツ帝国ワシントン駐在大使。1921年から1928年までドイツ帝国議会議員、さらに1926年から1931年まで国際連盟ドイツ帝国代表を勤める。ヒトラー政権発足直後スイスのジュネーヴに亡命。
- 22 ドイツ生まれの Albert Ludwig Jaeger (1868-1925) により制作された。この彫像家は上述のフィラデルフィアのフェルノン公園内のパストリウス記念碑も制作した。
- 23 Arnold Fueredi: 上掲書, S139f. ならびに Russel A. Kazal: 上掲書 p.49f.
- 24 Katja Wüstenbecker: *Deutsch-Amerikaner im Ersten Weltkrieg. US-Politik und nationale Identitäten im Mittleren Westen*. (Transatlantische Historische Studien. Veröffentlichungen des Deutschen Historischen Institut Washington DC., Bd.29) Stuttgart: Franz Steiner, 2007.S.65.
- 25 この火災で、1425年創立の *Louvain* 大学【ドイツ語風には *Löwen*】付属図書館所蔵の様々な中世期の写本や貴重古書初版本などを含む、総計30万冊ほどの図書が消失した。第一次世界大戦終了後再建されたものの第二次世界大戦中1940年5月16日再び戦災で破壊された。戦後元の図面どおり再建され1987年には重要文化財に指定された。
- 26 1915年3月27日、リバプールから西アフリカに向け航行中の *Elder-Dempster* 運航会社所属の客船 *Falaba* 号【4806総トン、乗客140、乗員100、うち106名死亡】はドイツの潜水艦(U-28号)による魚雷攻撃を受けた。5189総トンの油輸送船 *Gulfight* 号はドイツの潜水艦(U-30号)の魚雷攻撃を受け乗員3名死亡。1915年5月1日、ニューヨーク港を出てリバプールに向けて航行中の英国 *Cunard Line* 運航会社の大型客船 *Lusitania* 号【30,396総トン】は、アイルランド沖で魚雷攻撃を受け沈没。“*The Lusitania Crisis*”, In: Arthur S.Link: *Wilson. The Struggle For Neutrality. 1914-1915* Princeton Univ. Press. 1960. p.372によれば、犠牲者の数は785名の乗客、乗員413名で合わせて1198名、女性270名、子供94名、アメリカ市民124名【128名と記している本(Richard Hofstadter/William Miller/Daniel Aaron: *The United States. The History Of A Republic*. NJ.; Prentice-Hall Inc. 1957.,3rd. Printed. p.610.)もある】であった。*Diomed* 号(4,672総トン)は、アイスランド沖西北西57マイル地点で潜水艦からの攻撃(魚雷ではなく艦砲射撃)を受けた。英国船籍の *Persia* 号は1915年12月30日、地中海のクレタ島沖南70マイルをエジプトに向かって航行中、ドイツ海軍の潜水艦の魚雷攻撃を受け519名の乗員乗客中343名が死亡した。
- 27 英国のグラスゴーとニューヨーク間を就航の *Anchor Line* 汽船会社所属のこの客船は、ドイツの潜水艦(U-85)の攻撃を受け沈没。41名の犠牲者を出した。
- 28 Charles Thomas Johnson: 上掲書, p.111.
- 29 Barba Wiedermann-Citera: *Die Auswirkungen des Ersten Weltkrieges auf die Deutsch-Amerikaner im Spiegel der New Yorker Staatszeitung, der New Yorker Volkszeitung und der New York Times 1914-1926*. F.a.M./Berlin/New York, et al: Peter Lang 1993. S.111., Katja Wüstenbecker: 上掲書 S.147f., この条項は戦争終結までに【1917年11月16日の残り8項目】20もの規則が制定された。
- 30 Mark Sullivan: *Our Times. The United States 1900-1925. V. Over Here 1914-1918*, New York/London: Charles Scribner's Sons. 1946., P.476.
- 31 Nick Salvatore: *Eugene V. Debs. Citizen and Socialist*. Urbana/Chicago/London: University of Illinois Press., 1982,p.288.



- 32 英国ロンドン滞在を経て1885年頃オハイオ州クリーブランドに移住、「葉巻タバコ会社」に職を得ながら「ユダヤ日刊新聞 *Jewish Daily News*」に盛んに投稿執筆活動を展開していた。写真出処：The Literary Digest for June 15, 1918, p.13.
- 33 The German-Americans: An Ethnic Experience. American edition (ed. translators La V. J. Rippley & Eberhard Reichmann). Bloomington, Indiana: Max Kade German-American Center. 1993, p.185f.
- 34 この人物に関しては長友雅美：『ドイツ系アメリカ人による社会主義運動』・東北大学大学院国際文化研究科論集、第19号、2011年の46頁以下を参照されたい。
- 35 現在はルーマニア中部の山村 Nieder-Rehbach にドイツ系ユダヤ人として生まれ、ブダペストとウィーンの両大学に学び、1878年両親とともにアメリカに移住。コネチカット州のブリッジポートからウィスコンシン州ミルウォーキーに転居。同市の新聞社に勤務しながら政治運動に参加。1897年に後のアメリカ社会党となる政治団体を結成。
- 36 Russel A.Kazal: *Becoming Old Stock. The Paradox of German-American Identity*-Princeton Univ. Press., 2004., P.176. Charles Thomas Johnson: 上掲書, p.154. この事件に関する包括的な文献には、事件75周年記念式典【1993年4月3日 Society for German-American Studies (SGAS) 主催によりセントルイスのセント・マチュー墓地 *St. Matthew Cemetery* のプラーガーの墓石前で開催】実行委員 F.A. アレン女史編集の【Franziska Ott Allen: “The Anti-German Hysteria: The Case of Robert Paul Prager. Selected Documents”, In: Don Heinrich Tolzmann (ed.) *German-Americans in the World Wars: A Documentary History*. München: K.G.Sauer, 1995, Vol.1, pp.273-365.】がある。
- 37 Katja Wüstenbecker: 上掲書, S.197.
- 38 Frederick C.Luebke: *Germans in the New World: Essays in the History of Immigration*. University of Illinois Press, 1999, p.40. 適訳がないため *University of Colorado preparatory school* を小稿では「コロラド大学予科」とした。
- 39 Katja Wüstenbecker: 上掲書, S.270.
- 40 Frederick C.Luebke: 上掲書, p.40.
- 41 Katja Wüstenbecker: 上掲書, S.259.
- 42 Don H.Tolzmann (ed.) : *German-Americans in the World Wars. Vol I. (The Anti-German Hysteria of World War One.)* München/New Providence/London/Paris. K.G.Sauer, 1995. S.320 („Der Kaiser, die Bestie von Berlin” In: *Amerika Woche* 6.März 1993, S.6.)
- 43 ハイデルベルク大学で古典文献学を学び、ライプチヒ大学に移籍。同市内の音楽院でピアノの研鑽も積む。才能が認められゲバントハウス・オーケストラとも競演、後チューリッヒでオペラの研究と指揮法を習得し、各地で指揮者として活躍。1901年にバイロイト祝祭歌劇場でワーグナーの『バルチファル』の指揮を行う。1906年にボストン交響楽団の指揮者に就任、1912年から常任指揮者として活躍していた。戦争終結までアメリカ官憲の監視下におかれ、1919年の保釈後ドイツに帰国。1922年から1933年までハンブルク交響楽団の指揮者として活躍、シュツットガルトで余生を過ごした。ムックの経歴については Theodor Bakers (edit./completely rev. by Nicholas Slonimsky): *Biographical Dictionary of Musicians*. 5th.Edition, New York: G.Schirmer, 1958. p.1130 を参照。
- 44 因みにこの曲が正式に国歌となったのは1987年12月11日。
- 45 Katja Wüstenbecker: 上掲書, S.297.
- 46 Katja Wüstenbecker: 上掲書, S.298.
- 47 Katja Wüstenbecker: 上掲書, S.154.
- 48 Katja Wüstenbecker: 上掲書, S.286. ドイツ系アメリカ人で、シンシナティのドイツ系アメリカ人のために『ドイツの開拓者 *Der Deutsche Pionier*』という雑誌の編集やドイツ語学校の整備にも従事したラッターマン (Heinrich Arminius Ratterman: 1832-1923) が創設した保険会社。
- 49 1857年、18才で *Breuschwickersheim* 【現在のフランスのアルザス地区】からアメリカに移住、ミルウォーキーを定住の地としたジョージ・ブルンダーは、1864年に本屋を買いとり印刷工房を起し出版活動を開始、その後1873年にルター派教徒のためのドイツ語新聞「ゲルマーニア *Die Germania*」を創刊。1906年以後ブルンダーは、ミルウォーキーで発行されるすべてのドイツ語新聞の発行に関与、またウィスコンシン州内のいくつかの町やイリノイ州のシカゴ、ネブラスカ州のリンカーンでもドイツ語新聞の発行権利を有す大株主、さらにはゲルマーニアナショナル銀行 *Germania National Bank* (1903-1910)、コンコルディア火災保険会社 *Concordia Fire Insurance Company* (1897-1909) 等の金融会社社長としても活躍した。

- 50 Katja Wüstenbecker: 上掲書, S.289.
- 51 Don H.Tolzmann (ed.), Sourcebook for the German-American Heritage Month. Cincinnati: University of Cincinnati, 1991, p.32.Over-The-Rhine. A Description and History. Historic Conservation Office. Cincinnati City Planning Department. 1995, p.16.. それでもシンシナティでは「ゲーテ通り」と「シラー通り」、それに同市に所縁ある「ラッターマン通り」と初代市長の名を冠した「ツィーゲル通り」などはこの名称変更から免れている。
- 52 Katja Wüstenbecker: 上掲書, S.154, Rudolf A.Hofmeister: The Germans of Chicago. Stipes Publishing Co.,1976. p.72.
- 53 州知事ハーディングが発した「バベル宣言」の「バベル」とは、旧約聖書の【創世記（第11章）の、人間の傲慢と神の逆鱗に触れて崩壊した「バベルの塔」の話】に由来する。
- 54 D.H.Tolzmann (ed.): German-Americans in the World Wars., p193.,Katja Wüstenbecker: 上掲書, S257.
- 55 Dennis Baron: The English-Only Question. An official Language for America?. New Haven/London: Yale Univ. Press.,1990. P.111.
- 56 1923年、連邦最高裁判所は英語のみが公用語であるとしたネブラスカ州、オハイオ州、アイオワ州の外国語制限に関する法立は合衆国憲法違反であるとし、外国語を教えかつ学ぶ権利は、第14修正条項 [Meyer v. State of Nebraska, 262 U.S. 390 (1923)] によって保護されていることを確認した。
- 57 ドイツ系アメリカ人薬剤師会発行の *Deutsche-Amerikanische Apotheke Zeitung* ではドイツ・オーストリアの枢軸国側の戦局不利に伴い英語記事が増加していったにも関わらず1919年の時点でも、ドイツ語による記事が紙面をにぎわしていた。このニューヨークで発行されていた新聞は、薬剤師のみならず調剤薬局に出入りする医師からの処方箋を持ってたちよる顧客も読者としていたことが、記事内容から推察される。新薬の説明や効能、薬剤師関係者の動向よりも、内容は祖国ドイツの文化紹介、合衆国国内会員の移民と定住されに現在に至る苦勞話やドイツ文学作品紹介記事などが、適宜に紙面をにぎわしているからである。またこの新聞購読者のなかにはかなり数の大学関係者、ニューヨーク州や隣接各州の諸大学・研究機関で活躍するドイツ系アメリカ人科学者たちもいたようで、これらの研究機関の紹介記事もドイツ語で紹介されている。